

の誕生』〔石井 二〇一五〕他の著作と共鳴しており、石井の著作も併せ読むべきである。

(2) この報告について「どこか楽しかった高揚とやりどころがない空振りぶり」とだけしか本書にはない当時への言及は、同じ報告者の一人だった小川徹太郎の遺稿集への「解説」でより具体的に、そしてどこかパステイックなトーンで記されている

〔佐藤 二〇〇六〕。

(3) <http://gazo.dl.ic.u-tokyo.ac.jp/gakui/cgi-bin/gazo.cgi?no=216214>

参考文献

飯倉義之 二〇一三「都市伝説が「コンテンツ」になるまで―「都市伝説」の一八九八―二〇二一」『口承文芸研究』第三六号

石井正己 二〇一五『テキストとしての柳

田国男 知の巨人の誕生』三弥井書店

大月隆寛 一九九七『顔あげて現場へ往け』青弓社

佐藤健二 一九九一「解題および講演の復

元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第

三四集

佐藤健二 二〇〇六「解説」小川徹太郎

書評

佐藤健二著

『柳田国男の歴史社会学

続・読書空間の近代』

川村 清志

はじめに

「読む」という行為の途方もなさを教えてくれたのは、たぶん、佐藤健二である。

「読む」こととは、単に書かれた内容を理解するだけではない。意味のわからない術語や人名を確認し、引用される論文や本を後づけし、著者の意図を推し量つても十分ではない。全一的にみえるテキストの

読みをずらし、本というメディアの自明にして秘められた断層を、佐藤は「読者」に突きつける。佐藤は本のそこに配置された著者の意図、意志、戦略、戦術を読み取り、さらに、それとは「異なる読み」と

「異なる本」の可能性までも幻視しながら、テキストの地平を踏査しようとする。

かつての私は、その底知れないテキストの迷宮からは、逃げた。正直いえば、今も逃げたい気分ではいっばいである。この依

『越境と抵抗』新評論

二〇一五年二月

せりか書房刊
本体三八〇〇円

(やの・けいいち/静岡大学)

頼も、最初は断ろうと考えた。しかし、や
や不本意な巡り合わせを経て、私はこの本
について書くことにした。ただし私は、一

人のフィールドワーカーとして、この本を
「読む」。テキスト・クリティカーとして
真正面から相対するのではなく、いわば斜
めからみる立場をとる。残念ながらその結
果は、多くの人の溜息を誘うものになるだ
ろう。もちろん、その責任の所在は私にし
かない。そのことは、最初にお断りしてお
きたい。

テキストとの距離

先に不本意な巡り合わせと記した。最初
の巡り合わせは、佐藤の本の巧妙な配置に
囚われたことである。本書は柳田國男のテ
クストから、「老い」の意味を読み取ろう
とする研究ノートから始まる。その直接的
な意図は、副題にも明示された『読書空間
の近代』の続編としての体裁を整えるもの
かもしれない。しかし、そのテーマは、私
の直近の経験を鋭角に抉った。本を捨てて

野にでた私は、ほぼ二五年間、祭りや民俗
芸能を中心にフィールドワークを続けて
きた。

私にとつてのフィールドワークとは、何
だったのか。それは、インタビューよりも
参与観察を専らとするものだった。より正
確には、「参与」^{パティシペーション}に重きをおいていたと言
うべきだろう。私は、自ら調査対象となる
祭りに参加した。地元の人々と共に御神酒
を啣り、準備作業を手伝い、後片付けを
指示した。曳山を引き、神輿を担ぎ、獅
子を舞った。そうやって四半世紀の月日が
流れていった。それはとても長い道のりの
ようでもあり、瞬く間の出来事のようにも
ある。もちろん、今だから、言えることで
ある。

気がつけば私には、もう若衆と祭りを続
ける体力は残されていなかった。夜を徹し
て語り合うことも、酔いつぶれてリバー
スしてから、飲み直す気力も失われた。もち
ろん、そのような調査をいつまでも続けら
れるものではない。自分の調査に区切りを
つけ、研究者の本分に立ちかえる頃なのだ

ろう。そう、言い聞かせる自分がいた。だ
から、この本が「老い」から始まっている
ことに、密やかな共感が湧きでることを抑
えられなかった。そこに私は、フィールド
ワーカーとしての自らの「老い」を重ねて
いた。

さらにいえば、柳田國男から「老い」の
積極的な意味を立ち上げることに困難を覚
える、佐藤にも共感を感じていたのかわし
れない。「老い」の救済を論じられるとは
思わない」（一六）と嘆息する佐藤の真摯
な眼差しに、受容すべき「老い」への抗い
の痕跡をみていたともいえる。

蛇足だが、このかなり早い時期に記さ
れ、リライトされたであろう「老い」のテ
クストの重層性にも気づかされる。実際、
このテキストは、柳田の老いを語りつつ、
佐藤が研究者のネットワークのなかで邂逅
した知の先達たち、とりわけ、鶴見俊輔へ
の弔辞となつていようにもみえる。鶴見
の引用や彼の思い出について記された言葉
には、佐藤の預言者としての側面がよく表
れている。テキストのテキストたる所以だ

ろうが、彼の本の特徴が、あるテーマや方法のもとに異なる位相、異なる時空がかけあわされ、響き合う、知の共鳴作用にあることも指摘しておきたい。

そうやってこのテキストに迷い込んだ私は、もう一つの邂逅を遂げることになる。

もっともそれは、この本へと私を誘った導き手にとっては、織り込み済みのものだろう。著者である佐藤にとっては「発見」でさえない、自明の理なのかもしれない。私の目の梁を、彼が当たり前のように払ってくれただけである。それは柳田國男という人物と対象との重層的な関係性についての描写に他ならない。柳田が「郷土研究」に託した意図の現在性、と言いかえてもいい。もちろん、その全てに私自身が同意できるわけではない。それでもこの位置づけは、私が今考えつつある「民俗学者」のありようと、幾つかの不協和音を奏でながらも響きあった。佐藤の言葉に従えば、「方法」として、あるいは「運動」としての柳田國男が、私の見てきたものと重なったのである。そういう訳で、私は『柳田國男の

歴史社会学―続・読書空間の近代』と向かいあう羽目になった。

柳田國男というテキスト

本書は、柳田國男のテキストを軸としながら、彼が構想した「民俗学」の可能性を批判的に捉えなおしていく。「はじめに」に続く一章の「テキスト空間の再編成」は、柳田國男のテキストを「読む」という実践の記録である。ここでは柳田の「初の全集」の編纂に取り組み際に生じた課題と、渦中で生じた問題と、新たに像を結びつつある発見が示されている。「全集」というアーカイブの形式が要請する様々な問題に対処しつつ、翻って『定本柳田國男集』が創りあげたベースタイプを批判的に再考する。第二章では、『遠野物語』において怪異の陰に隠れている「現実の空間や生活の記述」(二二五)の可能性が、第三章では「写真」をめぐる柳田國男の重層的な視座が明らかにされる。さらに第四章は「歴史社会学」の視座から、柳田國男に

ついてのやや性急で偏った評価が丁寧に拭かれる。同時に未発のままに埋もれていた複数の可能性とそれらを「読む」ための視座が提示される。この本の要と捉えている。第五章と第六章は、柳田國男という存在自体を脱中心化することで浮かび上がる「民俗学史」の可能性が試行されている。折々の論争やある時代のエポックとなる論集、地方の研究者ネットワークなどに触れながら、「年表」に収まらない学史の可能性が探求されている。

また、各章ごとに副次的なテーマが張り巡らされ、それらが複数の章を横断しつつ、その多様な側面を照射する役割を果たしている。例えば、柳田國男における「郷土」の概念は、第二章で喚起され、「付論」のテーマとしてより踏み込んだ議論がなされ、第四章へと引き継がれる。第二章で示された柳田國男と「自然主義」との距離は、彼のテキスト論へと読み替えられ、農政官僚時代の地方視察における対象への眼差しとも重ね合わさっていく。これらの議論は三章の写真論のなかでテーマ化される。柳田

が写真を読む視線、テキストにおける具体的な写真の利用法、隠喩としての写真と民俗学的方法論が、相互に反響し合いながら読み解かれていく。また、四章で佐藤が柳田のテキストから見出した「歴史」へのまなざしは、五章や六章でテーマ化される「学史」としての歴史へと接続される。特にこの「学史」の再構成に至る視点には、

佐藤の態度、あるいは方法が如実に現れている。彼は、柳田が日本の民俗や歴史にむけた眼差しを、再帰的に民俗学自体の歴史にもむけているわけである。

これらのテーマを掘削した時に貌をのぞかせる各々の鉱脈は、思いの外、深く、広い。到底、限られた原稿量で論じ尽くせるものではない。不可能な企てである。そこで

であえて以下では、ただ一点に論を絞ってテキストを読み込んでみたい。それは「柳田國男を読む」という行為は、現在の民俗学には、さらにはフィールドワークにどのような意味をもちうるのか、という点である。

この問いかけは、あるいは自己再帰的

であるより自己完結のかもしれない。横断領域的というよりは領域従属的かもしれない。私の読みは、この豊かなテキストについての一つの、しかも限定された読みすぎない。テキストの読みが複数的であることも、佐藤による柳田の読解において再認識される重要な視点である。

「郷土」と歴史社会学

最初に、問いに対する私なりの応えをまとめておこう。柳田を読むという行為の意義とは、それが現在の民俗文化研究がようやくたどり着いた場所の方法論的な基礎となりうる、という点にある。とりわけ重要な点は、佐藤が柳田から導き出した「歴史社会学」としての可能性である。彼はその特質を(1)歴史遡及の現在性、(2)比較の脱領域性、(3)自己再帰性の三点に整理する。いずれも戦後の日本民俗学の趨勢とは程遠いベクトルである。

まず彼は、民俗学が求める「歴史」とは、現在からの遡及的なものであると捉え

る。「現実の社会問題」(二三〇)や社会現象の「変動の理由」を「歴史的・社会的な関係性の変容」から考察することが目指される。次にダイナミックな「比較」の視座と方法が目指されることになる。佐藤が捉える「比較」とは「空間的・共時的な対照にだけかぎるかたよった限界を打ちやぶり、時間的・継時的な対照の実践を含む領域」(二三三)だという。しかもそのような眼差しは、研究自体の「脱領域化」を促し、「学際性」と呼ばれたような、境界横断の特質が生まれざるをえない(二三四)という。さらに重要な点が第三の「自己再帰性」(二三五)である。研究者は探究すべき対象と向かい合う姿勢が問われ、その動機の所在が研究の専門性に遡行して問い直される。例えば、柳田國男を読み直す研究者は、いかなる視点と方法論のもとに、どのような目的と意図と可能性をもって挑むのか、ということである。それは「方法にかかわる問いであると同時に、対象と主体の位置関係にかかわる問い」(二三六)でもある。

しかも佐藤は、この三つの視座を掲げたうえで、「歴史社会学」の探究すべき世界を、「文字以外の歴史」へと広げていく。もちろんそれは文字Ⅱ歴史学、声Ⅱ民俗学といった硬直した二分法を踏襲することではない。何よりも身振りや声には、「眼前

通文化の抽出ではなく、比較や批判の共有なしにはたちあがらない」（二七三）ものと位置付けられる。佐藤は「郷土研究の特質」を「担う主体にわりあてられた実践」（二五六）から検討しようとしていたのである。

の事実」という意味での「現在性」を有している」と佐藤は語る。「現在の現象に、構造的に作用している力のありようを、変遷として、あるいは変容として語ることができた時、われわれは「歴史」を構築しえたといえる」（三六一）のである。

このような「郷土」、ないしは「郷土研究」が、柳田による構想の域をでていない、と言えないことはない。ここで想像される「担う主体」とは、都市の知識人を超えるものではない、とも主張できる。佐藤の眼差しの圏域は、印刷資本主義に促された雑誌（謄写版も含めてだが）やそれらに

ドワークを行う者にとって避けられない視座となっている。詳細を説明するではないし、その必要もないくらいに民俗学は危機に瀕している。一方では、過疎と高齢化に歯止めはかからず、多くの地域で民俗文化はおろか、地域社会そのものが消滅しようとしている。他方で、閉塞状況の地域社会に対して応用的なディシプリンは、民俗学や歴史学などの知見を表層的に流用しながら、「地域」や「文化」の「振興」を謳いあげる。調査地の現状からも学問の要請からも、民俗学は取り残されている。

この拡がりのなかで前景化される対象が、「郷土」に他ならない。それは一九三〇年代に展開した「郷土教育」のよ

うに地域を特化し、ともすればお国自慢に偏するような固定的な領域ではない。近年の柳田批判に連なる定型として、「民族や「国家」についての本質主義的な主張と同じ位相で捉える議論からも切斷される。「郷土」とは、「身体レベルで設定された、無意識にまで根ざす主体性」（二六四）と読み込まれ、研究にあたっては「単純な共

このような状況のなかで民俗学がなすべきことは、地方自治体の「歴史」記述に甘んじ、講演やワークショップで権威をかざすことではない。現地では冷徹な観察に徹し、アカデミズムや学会という空疎なネットワークのなかで、事例を弄ぶことでもない。そのような作業で「民俗学」が維持できると考えている者がいるとしたら、それは単なる無知か、相当の偽善者である。

は「郷土研究」の諸相は、現在、フィール

ドワークのなかで、事例を弄ぶことでもない。そのような作業で「民俗学」が維持できると考えている者がいるとしたら、それは単なる無知か、相当の偽善者である。

フィールドワーカーの実践は、様々な

問題を抱えつつ、現に今を生きている人たちのあり方と、彼らのこれからの生活を築く方途を探ることなしにありえない。そのため我々は、「郷土」にある人々と協働しなければならぬ。(1)現状を多面的に理解するためにこれまでの社会の歩みを遡行し、検証する視座を養うべきである。(2)

研究者の知見と照らし合わせ、他地域や他分野の研究の成果と(場合によって応用的な)実践の諸相を整理し、分析し、共有していく必要がある。(3)さらに我々は、そのような実践の意味を問い直し、その試みと課題と成果について考察していかねばならない。

このように対照化してみれば、佐藤が示す三つの視座は、今日の民俗学者のオーソドックスたりうることがわかる。佐藤が引用する柳田の言葉にも、調査の現場において「同じレベルに立って触れるという趣意」(二五〇)が説かれ、「共同作業」が「自己省察の修練」の場になることさえ示唆されている。ある意味で、現在の民俗学は、柳田國男が構想し、そして挫折した

「郷土研究」を、ようやく実践できる立場にあるのかもしれない。

ただし、と付け加えておこう。ここで紹介する「共同作業」とはあくまで研究者間における「協働」である。佐藤による「郷土研究」の対象化も、それらを共有するのは、研究を推進する側のネットワークであり、場であり、実践にとどまる。佐藤自身も「郷土はそれぞれの日常に住まう読者の実践のなかにしかあらわれない」(二七〇)と記している。

しかし、「共同作業」が作用する場を、フィールドへと拡大する積極的な誤読も、必要ではないだろうか。「郷土」を批判的にとらえ、現状の課題に取り組むのは、「同郷人」にこそ課せられたテーマのはずである。彼らが「担う主体」足らんとする時、民俗学者は自らの知見と実践のすべてをかけた「共同作業」をおこなう義務があるはずである。それは、おそらく「民俗学という学問が何を願ったのかという、いわば「本願」(二七四)を描きたそうとする佐藤の視線とも違うものではないはずである。

おわりに

本書で佐藤自身が明確には応えなかった重要な問いかけの一つが、「現代のわれわれの方法が、このような郷土研究の基準をみたしているのだろうか」(二七三)である。誤読を引き受けたうえでの一人のフィールドワーカーとしての回答は、これまでの議論の通りである。

民俗学は、その発祥からして屍臭の漂う学問だと三島由紀夫は語った。たぶん、それは今も変わらない。その屍臭のなかから、幾度かの転生の末に「新たな民俗学」が産声をあげるのか、それともまた、その声は未発のままに死産されていくのか。しかし、確かなことは、おそらく、もう、次はないということである。佐藤健二が、新時代の民俗文化研究の予言者であり産婆なのか、滅びゆく学問の予言者であり奪衣婆なのかは、ほどなく明らかになるだろう。

(かわむら・きよし／国立歴史民俗博物館)